

三崎を訪れた冬の珍客

大 島 廣

(福 岡)

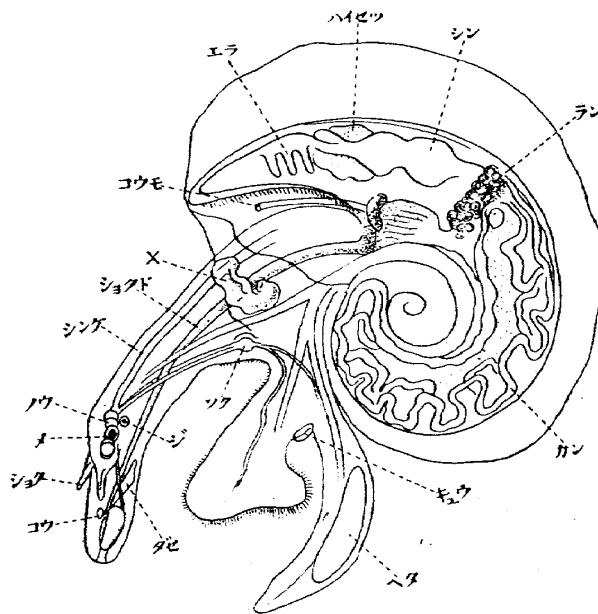
昨年暮、前期學生七人の臨海實習指導のため、竹脇理學士に手傳つて貰つて、三崎に十日間を暮した。私は尙ほ引續き一月上旬中居残つたが、學生諸君も四人迄休暇の終る間踏止まつて毎日勉強した。諸君が大に頑張つて勉強するのが天意に適つたのであらう、此冬は珍らしく賑かな動物群の訪問を受けた。

潮の工合が悪かつたので磯採集は一度もしなかつた。震災後無残に寂れた同地の磯は、近頃いづらか恢復して來たとは云ふけれども、往時の三崎に馴染深い吾等には何とも云へない情け無さを感じさせられる。

底曳は“魁”^{いさを}を出して二度試みた。一度は諸磯の灣内、今一度は小網代の灣口であつたが、諸磯ではアカウニに黒い寄生螺の二疋着いて居るもの、小網代では長さ四糎半のナメクデウヲを獲た。

表面網は例の如く毎朝順番に曳く事にしたが、殆ど毎日の様に豊富な Plankton が一同を喜ばせた。大きなものでは *Cestus*, *Leucothea*, *Hormiphora*, *Agalma* と云ふやうなクラゲの仲間。 *Salpa* の素晴しく大きいのが浮いて居たこともあつた。小さいものでは定連の縁膜水母、橈脚類などの種類が非常に多く、毛顎類では *Sagitta*, *Spadella*, *Krohnia* など、被囊類では *Doliolum*, *Appendicularia*, *Oikopleura*, *Fritillaria* など總動員の有様、中にも著しかつたのは異足類と翼足類が非常に多く毎日見られた事である。幼蟲では棘皮動物、苔蟲 (*Cyphonautes*), 紐蟲 (*Pilidium*), 筈蟲 (*Actinotrocha*), ギボシムシ (*Tornaria*), 腹足類 (*Veliger*), イソギンチャク (*Arachnactis*) 等、少數ながら殆どすべて代表的の者を見る事が出来た。

異足類では *Pterotrachea* の小さいのが二三度見られ、*Orygyrus* は可なり屢々現れたが、その外に之よりも稍大きい、*Atlanta* と思はれるもの (Fig. 1) が見付かつた。*

Fig. 1 *Atlanta*. (竹脇氏から)

* 食道の左側に異様のものがあつて蠢めいて居た(圖中×印)。多分吸蟲であらうと私は思つて居る。

1) 大島廣, 1930, 巻貝の寄生した海膽。天草雜組(その三)。動雜四九五號, p. 33.

2) ——1629, 珍しい異足類。天草雜組(その二)、動雜、四八三號, p. 23.

翼足類は今迄見た事の無い程に多種多様で、取りどりにその可憐な姿は一方ならず観察者を悦ばせる。所謂 Pteropoda thecosomata の類には胡蝶のやうな *Desmopterus*^{**} (Fig. 2) をはじめとし、*Peracle*, *Limacina*, *Creseis*, *Diacria*, *Clio*, *Hyalocylis*, *Cuvierina* 等々。Pteropoda gymnosomata では *Clione* (Fig. 3), *Paedoclione* (Fig. 4), *Thalassopterus* (Fig. 5) などが珍らしかつた。

變態を終つたギボシムシの幼蟲 (Fig. 6) を初めて見たが、同様のものを以前宮下理學士が、同地で發見さ



Fig. 2

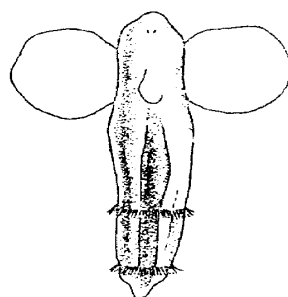


Fig. 3

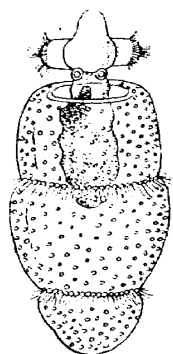


Fig. 4

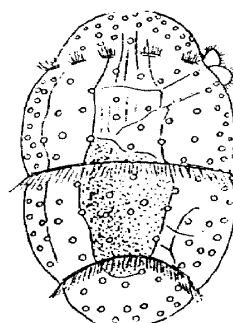


Fig. 5

- Fig. 2 *Desmopterus*. (石田氏から)
 Fig. 3 *Clione* (?). (竹脇氏から)
 Fig. 4 幼き *Paedoclione*. (岩佐氏から)
 Fig. 5 *Thalassopterus*. (竹脇氏から)

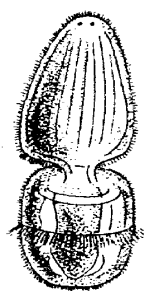


Fig. 6
 ギボシムシ幼蟲
 (竹脇、和田兩氏から)

れたことがあり、更に STIASNY 氏が詳しく之を紹介された。之は一九二二年十一月二十七日に獲て三日の間飼育されたとの事である。私達はいかなる文獻を知らなかつた爲め、十分詳しい觀察をせずに済んだのは残念であつた。

棘皮動物の幼蟲はコシタカウニのとブンブクの類との *Echinoplutei*, 種名不詳の *Ophiopluteus*, *Bipinnaria*, *Auricularia* などがたまに一つ二つ見られたが、正月二日には例の巨大な *Auricularia nudibranchiata* が現れた。この巨大海鼠幼蟲を最初に記載したのは CHUN 氏でカナリイ島で發見したのであるが、三崎のは私が記載し、更に同様なものがニュージーランドの北

^{**} *Dermopterus* と記した書があるが之は謬り。

- 3) 宮下義信、1925. わが近海のトルナリヤアに就て。動雜、四三八號、p. 170—177. (Pl. 2, Fig. 4 を見よ)。
- 4) STIASNY, G. 1928. Tornarien von Japan. Zool. Jahrb. Abt. Syst. Ökol. Geogr. Bd. 56. p. 67—92. (p. 83—85, Fig. 17 を見よ)。
- 5) CHUN, C. 1896. *Auricularia nudibranchiata*. Atlantis. Biol. Stud. ü. pelag. Organ. Bibl. Zool. H. 16.
- 6) 大島廣、1911. Note on a gigantic form of *Auricularia* allied to *A. nudibranchiata* CHUN. Annot. Zool. Japon. Vol. VII. —三崎に現るゝ巨大なる「アウリクラリア」。動雜、二七〇號、p. 222.—3. —再び三崎産巨形「アウリクラリア」に就て。動雜、二七八號、p. 712—6.

方で発見されて MacBRIDE 氏⁷⁾によつて報告された。MORTENSEN 氏⁸⁾は之等を同一種に屬させる譯にゆかぬとて A, B, C と區別し、カナリイ島のを *A. nudibranchiata* A 種、日本のを同じく B 種、ニウジーランドのを C 種と呼んで居る。

上に云つた様に、棘皮動物その他の幼蟲が、時候外れの冬期にごく稀ながら現れるのは實に奇妙である。春か夏、乃至は秋に産れた卵から發育しながら、生長のひどく遅れた者がかやうに出て來るのかも知れないが、私には、どこか南方常夏^{とこなつ}の國に冬生れ發育して居る幼蟲の、極く少數が潮に流されて時たまこの邊迄やつて來るのではあるまいかと思はれる。九州の西南側でさへ、海膽や海星の産卵期が三崎あたりのに比べて可なり違ふやうに思はることも、上述の推測に多少の強みを添へるものかと思ふ。

海蜘蛛が可なり多數上曳に入つた事が二朝あつた由であるが、私は迂濶にもそれを後に知つただけで一つも見ることが出來ず、又生憎誰も夫を寫生しなかつたので何の種類かを知る由も無かつた。上曳に海蜘蛛の入ることについて疑はれて居ることは嘗て書いたが、存外珍らしい事では無いらしく、現に三崎でも故遠藤博士¹⁰⁾が1916年の夏 “Pycnogonida は稀なりしかど出現したりき” と記して居られる。

海蜘蛛の事を云へば、十二月二十五日、小網代灣口、約二十尋の所から底曳で獲た海蜘蛛は、未だ丁寧に見て居ないが多分 *Ascorhynchus japonicus* IVES に同定して良いと思ふ。

こゝに掲げた六つの挿圖は、何れも私の寫生ではない。竹協理學士ほか學生諸君の寫生圖を借りて描いたもので、一々芳名を記して謝意を表することゝする。

-
- 7) MACBRIDE, E. W. 1920. Larvae of Echinoderma and Enterspneusta. British Antarctic ("Terra Nova") Exped. 1910. Zool., Vol. IV, No. 3. (p. 88—90を見よ)。
 - 8) MORTENSEN, Th. 1921. Studies of the development and larval forms of Echinoderms. Copenhagen. (p. 198—200を見よ)。
 - 9) 大島廣、1930. 浮游ウミグモ。天草雜俎(その三)。動雜、四九五號、p. 34—5。
 - 10) 遠藤吉三郎、1916. 三崎に於る今夏の浮游生物。動雜、三三四號、p. 319—323。